

# 月船禅慧の研究(三)

武溪集卷下

參學比丘海旭編

武溪集 卷の下

參学の比丘 海旭編

丹霞焼佛

有佛無佛 劫火洞然 汝若會取 罪犯彌天

丹霞焼佛<sup>(1)</sup>

有佛無佛、劫火洞然。<sup>(2)</sup>

汝、若し會取せば、罪犯彌天。<sup>(4)</sup>

(1) 丹霞天然が木佛を焼いた公案。『五灯会元』五の丹霞章に「後、慧林寺に於て天大寒に遇う、木佛を取って火に焼き向う。院主訶して曰く、何んぞ我が木佛を焼き得。師、杖子を以て灰を撥って曰く吾れ焼いて舍利を取る云云」とある。(2) 佛が有る佛が無い。(3) 『仁王経』に「劫火洞然して大千俱に壞す」とある。壞劫の火災は、一切のものを焼き尽すこと。(4) 事理を了解すること。(5) 『碧巖録』第五に「昨日恁麼の事、己を獲ず、又今日又恁麼、罪過彌天」とあり、「罪過彌天」と同じ。罪過が天に一杯になるほど多いという意。

## 鈴木省訓

南泉斬猫

一猫兩堂競 是誰能奉舉令 若人戴艸鞋 鮮血忽淋迸

南泉斬猫<sup>(1)</sup>

一猫兩堂競う、是れ誰ぞ能く令を奉ず。<sup>(2)</sup>

若し人、艸鞋を戴かば、鮮血、忽ち淋迸せん。<sup>(3)</sup>

(1) 『碧巖録』第六三則・六四則に「南泉一日東西の兩堂、猫兒を争う。南泉見て遂に提起して云く、道い得ば即ち斬らず、衆村無し。泉猫兒を斬つて兩段と為す。」又「南泉復た前話を奉して趙州に問う、州便ち艸鞋を脱して頭上に戴き出づ。南泉云く、子若し在らば恰も猫兒を救い得ん」とある。(2) 法令を作くる者。(3) 『從容録』の第九則の評に「鮮血淋迸」の語がある。

又

南泉舉令 趙州來遲 千古萬古 不救猫兒

又

南泉、令を奉ず、趙州來たること遅し。<sup>(1)</sup>

千古、萬古、猫兒を救わず。

(1) 趙州從諗禪師、南泉普願を嗣ぐ。

又

手提猫兒 頭戴艸履 湖海英靈 作甚麼伎

又

手に猫兒を提げて、頭に艸履を戴く。

湖海の英靈、甚麼の伎をか作す。

(1) 世の中、世間、江湖のこと。 (2) たくみ、うでまえのこと。

又

虎面猫兒氣自豪 兩堂杜撰口叨叨 腥風忽起南泉令

因是手中無利刀

又

虎面の猫兒、氣自から豪、兩堂の杜撰、口叨叨。

腥風、忽ち起る南泉の令、是れ手中の利刀無きに因る。

(1) ちから、いきおい。 (2) つよい、ただけしい。 (3) 『野客叢書』に「杜撰、詩を為すに、多く律に合わず、故に事の格に合わざることを言うに杜撰と為す」とある。著作などに誤りの多いこと。 (4) 口数の多いさま。 (5) なまぐさい風。

趙州戴履

頭上戴履 鬼哭神悲 祇可自救 不救猫兒

(1) 趙州、履を戴く

頭上に履を戴く、鬼哭し神悲しむ。  
祇だ自救すべし、猫兒を救わず。

(1) 『碧巖錄』第六三則に出づ。 (2) 死者のたましいが泣く、又その泣き声。

百丈

一事無奇特有人問汝宗 野狐身未脱 獨坐大雄峯

百丈

一事奇特無し、人有り、汝が宗を問う。

野狐身、未だ脱せず、独坐大雄峯。

(1) 百丈懷海。 (2) 『碧巖錄』第二六則に「僧、百丈に問う、如何なるか是れ奇特の事、丈云く独坐大雄峯、僧礼拝す、丈便ち打つ」とある。 (3) きつねの身。『無門関』第二則に依る。

又

不落不昧 幾生妖狐 好與一掌 赤乎胡鬚

又

不落不昧、幾く生の妖狐ぞ。好し、一掌を与うるに、赤いか胡鬚。

(1) 『無門関』第二則「百丈野狐」の中に「百丈和尚、凡そ參の次で、一老人有り、常に衆に随つて法を聴く。衆人退けば老人も亦た退く。忽ち一日退かず。師遂に問う「面前に立つ者は復た是れ何人ぞ。」老人云く「諸、某甲は非人なり。過去迦葉仏の時に於て曾つて此の山に住す。因みに学人問う、大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。某甲對えて云く不落因果と。五百生野狐身に墮す。今請う和尚、一転語を代り貴ぶらくは野狐を脱せしめよ」と。遂に問う、「大修行底の人、還つて因果に落つるや也た無や。」師云く「不落因果」と。云々」ある。 (2) 同じく「百丈野狐」の則に「師、晩に至つて上堂、前の因

縁を拳す。黄檗便ち問う「古人錯つて一転語を祇対し、五百生野狐身に墮す、転々錯ちずんば、合に箇の甚麼にか作るべき。」師云く「近前來、伊が与に道わん。」黄檗、遂に近前して師に一掌を与う。師、手を拍つて笑つて云く、「將に謂えり胡鬚赤と更に赤鬚胡有り」と。ある。(3)この語はいろいろと解釈されている。胡とは仏や達磨のこと。

又

機前喝下 一聾三日 獨坐雄峯 眼睛如漆

又

機前の喝下、一龍三日。獨坐雄峯、眼睛、膝の如し。

(1)『五灯会元』の百丈章に「師、再び馬祖に参じ侍立の次、祖、繩牀角の拂子を目視す。師曰く、此の用に即するか、此の用を離するか。祖曰く、汝、向後に兩片皮を開く。何を將つてか人の為にせん。師、拂子を取つて豎起す。祖曰く、此の用に即するか、此の用を離するか。師、拂子を旧処に挂く。祖、威を振つて一喝。師、直に待たり、三日耳聾すること」とある。(2)ひとみが黒いこと。漆瞳。

華林

猛獸哮吼 裴休失心 作何行業 南無大悲觀世音

華林<sup>(1)</sup>

猛獸哮吼、裴休失心。何んの行業をか作す。南無大悲觀世音。

(1)馬祖の法嗣、華林善覺。師は、大空小空の二匹の虎を侍者として、夜歩く時は、常に七歩毎に錫を振り、観音の名号を唱えた。宰相の裴休に虎を感化する秘術をきかれ、心中常に観音を唱えているからだと言ったという。『禪苑蒙求』上に出づ。(2)ほえる。ほえさけぶ。(3)山西省、聞喜の人。『唐書』では、孟州濟源の人とある。字は美。河東大士と呼ばれる。『伝灯録』十二に出づ。

石鞏 遂鹿從馬 祖庵前過

彼此是命 何不<sup>(1)</sup>自射 箭既離弦 天地懸隔

石鞏（鹿を逐い、馬祖の庵前從り過ぐ）

彼此、是れ命、何んぞ自から射らざる。箭、既に弦を離る、天地懸隔。

(1)『伝灯録』に「馬祖の法嗣、石鞏の慧藏禪師、本と、七鞏を以て務と為す。沙門を見るを惡む。因に群鹿を逐う。馬祖の庵前從り過ぐ。祖乃ち之を迎う。藏問う、和尚、鹿の過ぎるを見るや否や。祖曰く、汝、是れ何人ぞ。曰く、獵者なり。祖曰く、汝、射を解くすや否や。曰く、射を解くす。祖曰く、汝、一箭に幾く箇所をか射る。曰く一箭に一箇を射る。祖曰く、汝射を解くせず。曰く和尚射を解くすや否や。祖曰く、射を解くす。曰く、和尚一箭に幾く箇所をか射す。祖曰く、一箭に一群を射す。曰く、彼此是れ命、何んぞ他の一群を射すことを用いん。祖曰く、汝既に是の如く知らば、何んぞ自ら射らす。曰く、若し某甲をして自ら射せしめば、即ち手を下す処無し。祖曰く、この漢、曠劫の無明煩惱、今日頓に息む。藏當時、弓箭を毀棄して、自ら刀を以て髪を截り、祖に投じて出家す」とある。(2)『信心銘』に「毫釐も差有れば、天地懸隔す」とある。天地の間隔の測り知りがたいほど至極のへだたりをもつこと。

又

維凡維聖 置之穀中 拗折弓箭 萬里清風

又

維れ凡、維れ聖、之を穀の中に置く。

弓箭を拗折すれば、萬里清風。

(1)『莊子』の「徳充符」に「穀中」の語がある。矢のとどく範中をいう。(2)『五灯会元』卷五の三平義忠章に「初め石鞏に参ず、鞏、常に弓を張り箭を架し來機を接す。師、法席に詣る。鞏曰く、箭を看よ。師、胸を撥開して曰く、此は是れ殺人箭か活人箭か。又、作麼生。鞏、弓絃を弾すること三下。師乃ち礼拝す。鞏曰く、三十年、弓を張り箭を架す。祇だ半箇の聖人を射得す。遂に弓箭を拗折す」とある。拗折とは、折る、折れるの意。

普化

不是凡不是聖 喫生菜作驢鳴 正好忝 直穰如今裁  
得成

普化<sup>(1)</sup>

是れ凡ならず、是れ聖ならず。<sup>(2)</sup>生菜を喫して驢鳴を作す。正に好し去  
るに、直穰<sup>(3)</sup>、如今、裁し得て成る。

(1)『五灯会元』卷四の普化和尚の章に「鎮州普化和尚は、何れの許の人か知らざるなり。盤山に師事す。密に真訣を受けて佯狂し、言を出すに度無し。盤山の順世に暨んで乃ち北地に於て行化す。或は城市、或いは塚間に一鐸を振って曰く、明頭来、明頭打、暗頭来、暗頭打、四方八面来、旋風打、虚空来、連架打」とある。(2)『五灯会元』の普化和尚の章に「凡そ人を見るに高下無く、皆な鐸を振うこと一声。時に普化和尚と号す。或は鐸を將つて人の耳辺に就き之を振う。或は、其の背に附し回顧する者有らば即ち手を展べて曰く、我れ一錢を乞う。非時に食に遇えば亦た喫す。嘗つて暮れに臨濟院に入つて生菜を喫す。済曰く、這の漢、大いに一頭の驢に似ると。師、驢鳴を作すと」とある。(3)『五灯会元』卷四に普化和尚の章に「臨濟一日、河陽木塔の長老と同じく僧堂の内に在つて坐し、正に説く。師毎日街市に在り、撃風撃顛す。知んぬ、他は是れ凡か是れ聖か。師忽ち入り来たる。済便ち問う、汝は是れ凡か是れ聖か。師曰く、汝且く道え、我は是れ凡か是れ聖か。済便ち喝す。」とある。又「唐の咸通の初め將に滅を示さんとす、乃ち市に入つて人に謂つて曰く、我れ一箇の直穰を乞う」とある。

又

明頭暗頭 四方八面 與麼不與麼 齋在大悲院

又

明頭暗頭、四方八面。与麼 不与麼 齋是大悲院に在り。

(1)前出。(2)『五灯会元』卷四の普化和尚章に「一日臨濟、僧をして捉住せしめて曰く、

総に不恁麼に来たる時如何んと。師拓開して曰く、来日大悲院裏に齋有り。」とある。

又

河陽新婦子 木塔老婆禪 惟有風顛漢 搖鈴過市廛

又

河陽は新婦子、木塔は老婆禪。<sup>(1)</sup>  
惟だ風顛漢のみ有り、鈴を揺り、市廛<sup>(2)</sup>を過ぐ。

(1)『五灯会元』卷四の普化和尚章に「師、手を以て指して曰く、河陽の新婦子、木塔の老婆禪、臨濟の小厮兒、却つて一隻眼を具す」とある。(2)店舗、町の店。

又

背翻筋斗 踏倒飯牀 不凡不聖 恁麼風狂

又

筋斗<sup>(1)</sup>を背翻し、飯牀<sup>(2)</sup>を踏倒す。  
凡ならず、聖ならず、恁麼に風狂。

(1)『伝灯録』卷七の盤山宝積章に「師、將に順世せんとす。衆に告げて曰く、有人の吾が真を貌得するや否や。衆皆な將に真を写し得て師に呈せんとす。師、皆な之を打す。普化出でて曰く、某甲貌得す。師曰く、何んぞ老僧に呈せず。普化乃ち筋斗を打して出づ。師曰く、這の漢、向後風狂の如くにして人を接して去ること有らん」とある。背後に身を翻転する。(2)『臨濟録』の勸弁に「師、一日普と同じに施主家の齋に赴く次で、師問う、毛は巨海を呑み、芥は須弥を納ると。是れ神通妙用と為すや。本体如然なりや。普化飯牀を踏倒す」とある。

黄檗

大唐國裏 無師無禪 後生可畏 打爺有拳

黄檗<sup>(1)</sup>

大唐国裏、師無く禅無し。<sup>(2)</sup>後生畏るべし、打爺<sup>(3)</sup>に拳有り。

(1)黄檗希運、百丈を嗣ぐ。臨済の師。(2)『碧巖録』第十一則に「黄檗、衆に示して云く、汝等諸人尽く是れ唾酒糟の漢。恁麼に行脚せば何れの処にか今日有らん。還た大唐国裏に禅師無きことを知るや。時に僧有り、出でて云く、只だ諸法徒を匡し、衆を領するが如きんば、又、作麼生。檗云く、禅無しと道わず、只だ是れ師無し」とある。(2)『論語』の子罕に出づ。後輩の人は氣力がさかんで、努力しだいでおいに進歩向上するからおそるべきである。(3)『佛光録』に「是れ誰ぞ、打爺の拳を使うを解す」とある。臨済に打爺の拳の語がある。

瀧山仰山 鴉銜 紅柿

紅柿落前 師資穆穆 非分一半 誰知生熟

瀧山仰山(鴉、紅柿を銜む)

紅柿前に落ち、師資穆穆。一半を分けるに非ずんば、誰か生熟を知らん。<sup>(4)</sup>

(1)『伝灯録』卷十一の仰山慧寂章に「師、瀧山と遊行する次、烏一紅柿を銜み前に落す。祐將つて師に与う。師接待して乃ち水を以て洗了つて却つて祐に与う。祐曰く、子、什麼れの処より得來たる。師曰く、此は是れ和尚の道德の感ずる所なり。祐曰く、汝も也た空然を得ず。即ち半を分けて師に与う」とある。(2)師匠と弟子。手本とたすけ。(3)態度のうるわしいさま。うやうやしいさま。(4)未熟と成熟。

香巖

畫餅不充飢 捲衣下大瀉 白厓舊基在 春睡夕陽遲

香巖

画餅、飢えに充たず、衣を捲いて大瀉を下る。

白厓旧基在り、春睡夕陽遲し。<sup>(2)</sup>

(1)『五灯会元』卷九の香巖智閑章に「遂に瀧山に參ず。山問う我れ聞く、汝百丈先師の処に在つて、一を問えば十を答え、十を問えば百を答うと。此は是れ汝が聰明靈利なり。意解識想、生死の根本なり。父母未生の時、試みに一句を道え。看ん。師、一問せられて直に茫然なることを得。寮に歸り、平日看過底の文字を將つてす。頭従り一句を尋ね酬對せんと要するに、竟に得ること能わず。乃ち自ら嘆じて曰く、画餅飢えを充るべからず」とある。(2)同章に「乃ち泣いて瀧山を辭し、直に南陽を過ぎ、忠国師の遺跡を觀る。遂に憩止す。一日草木を芟除す。偶々、瓦礫を抛つて竹に撃し、声を作す。忽然と省悟す」とある。

又

一撃忘所知 何必涉繁詞 獨坐庵前竹 清風滿面吹

又

一撃、所知を忘す、何んぞ必ずしも繁詞に涉らん。獨坐庵前の竹、清風滿面吹く。

(1)『五灯会元』の香巖智閑章の頌に「一撃所知を忘す、更に修持を仮りず、動容に古路を揚ぐ、悄然の機に墮せず、處々蹤跡無く、聲色外の威儀、諸方達道の者、咸く言う上上の機」とある。(2)『大慧普說』に「山僧、昔年、曾つて佛性と道話す。此の因縁に及んで、佛性に謂つて曰く、香巖の此の頌に、美なることは則ち美なり。然も未だ繁詞を免れず。若し某甲に扱らば、只だ一撃所知を忘すというを消して便に了せん。佛性大いに似て然りと為す」とある。

又

一撃復一撃 清風八面吹 若謂揚古路 猶未忘所知

又

一撃復た一撃、清風八面吹く 若し古路を揚げると謂わば、猶も未だ

所知を忘ぜず。

(1) 清らかな風があちらこちらから吹いてくる。(2) 前出。古くからある路。転じて佛祖や古人古徳の履踐した路。向上の一路。

又

一撃一撃 無地無錐 會與不會 別喚沙彌

又

一撃一撃、地無く錐無し。會と不會と、別に沙彌を喚べ。

(1) 『五灯会元』の香嚴章に「又頌を成りて曰く、去年の貧は未だ是れ貧にあらず、今年の貧は始めて是れ貧。去年の貧は、猶お卓錫の地有り、今年の貧は錐も也た無し。仰山曰く、如来禪は、師弟の会することを許す。祖師禪は未だ夢にも見ざる在り。師、復た頌有りて曰く、我一機有り、瞬目に伊を視る。若し人会せずんば、別に沙彌を喚ぶ。仰山乃ち瀟山に報じて曰く且(しや)喜(き)すらくば、閑の師弟、祖師禪を会す」とある。

龐居士

萬法不侶 吸盡西江 漉籬價減 已矣老龐

龐居士<sup>(1)</sup>

万法侶ならず、西江を吸尽す。漉籬<sup>(2)</sup>價減ず、已んぬるかな、老龐。

(1) 馬祖道一の法を嗣いだ居士。字は道玄。一般に龐居士と言う。(2) 馬祖と龐居士との師資投機の因縁。『伝灯録』卷八の龐居士章には「馬祖に参問して云く、万法と侶と為さざる者は是れ什麼人ぞ。祖云く、汝、一口に西江の水を吸尽するを待って即ち汝に向つて道わん。居士言下に頓に玄要を領ず」とある。(3) 同前。初め東巖に住し、後に郭西の小舎に居す。一女ありて靈照と名づく。常に墮つて竹の漉籬を製して、之を鬻がしめて以て朝夕に供す」とある。

靈照女

沽諸竹漉籬 天下不酬價 去矣勿遲回 爺爺今將化

靈照女<sup>(1)</sup>

沽らんや、諸竹漉籬、天下、価を酬なわず。去れ、遅回<sup>(2)</sup>すること勿らん、爺爺、今將に化せんとす。

(1) 唐代の人。龐居士のむすめ。禪機にすぐれ、丹霞天然との機縁で知られている。(2) ぐずぐずして決心がつかないさま。ぶらぶらさまよう。(3) 『伝灯録』卷八の龐居士章に「居士將に入滅せんとす、女靈照をして出でて日の早晩を視せしむ。午に及んで以て報せ令む女、遽(にわか)に報じて曰く、日已に中、而も蝕有り。居士戸を出でて觀る次、靈照即ち父の座に登つて合掌して坐亡す。居士笑つて曰く、我が女、鋒(ほう)捷(しょう)なり。此に於て七日を延べて化す」とある。

臨濟

五逆天崩 一喝雷奔 都盧大地 作你兒孫

臨濟<sup>(1)</sup>

五逆、天崩れ、一喝、雷奔る。都盧<sup>(2)</sup>の大地、你が兒孫と作る。

(1) 臨濟義玄(2) 『五灯会元』卷十九五祖法演章に「問う如何なるか是れ臨濟下の事、師曰く五逆雷を聞く」とある。(3) すべて、一切残らず全部。

又

吾宗到汝興 又向驢邊滅 無端遇大風 褒裏走卻鼈

又

吾が宗、汝に到つて興り、又、驢<sup>(2)</sup>辺に向つて滅す。端無く大風<sup>(3)</sup>に遇う、

甕裏、鼈を走却す。

(1)『臨濟録』の「行録」に「師、松を栽うる次で黄檗問う、深山裏に許(そこ)外(ばく)を栽えて作麼か作(せ)ん。(中略)黄檗云く、吾が宗、汝に至つて大いに世に興らん」とある。(2)同前「師、遷化に臨む時、坐に拠つて云く、吾が滅後、吾が正法眼蔵を滅却することを得ざれ。(中略)三聖便ち喝す。師云く、誰か知らん、吾が正法眼蔵、這の瞎驢辺に向つて滅却せんといい詛つて、端然として示寂す」とある。(3)同前「仰山云く、一人南を指して、吳越に令行せん。大風に遇わば即ち止まん」とある。(4)かめの中(5)動詞のあとにつけて「してしまふ」のおもむきを示す。

又

去去来来、途中家舎、此事猶疑、卻回終夏

又

去去来来、途中の家舎、此の事猶お疑う、却回して夏を終わる。

(1)『臨濟録』の「行録」に「師、大愚を辞して、黄檗に却回す、黄檗来たるを見て便ち問う、這の漢来来去去して、什麼の了期か有らんとある。(2)修上の途上。『臨濟録』の「上堂」に一人有り、却を論じて途中に在つて家舎を離れず云々とある。(3)本家郷、自己本来の面目所を示す。(4)「きやうい」と読む(入矢義高訳註『臨濟録』岩波文庫)帰る。

又

諸方火葬、這裏活埋、常在狐峯頂、不離十字街、與麼不與麼、來日大悲院裏有齋

又

諸方は火葬、這裏は活埋、常に狐峯頂に在り。十字街を離れず、与麼不與麼、來日大悲院裏に齋有り。

(1)『臨濟録』の「行録」に「師、普請して地を鋤く次で、黄檗の來たるを見て、鏝を柱えて立つ。(中略)師、地を鏝して云く、諸方は火葬、我が這裏は一時に活埋せん」とある。(2)『臨濟録』の「上堂」に「一人は狐峰頂上に在つて、出身の路無く、一人は十字街頭に在つて、亦た向背無し」とある。(3)『臨濟録』の「勸弁」に「総に來たらざる時如何。普化托開して云く、來日大悲院裏に齋あり」とある。

又

槩山痛棒似蒿枝、一頓更思復有誰、暮色江村笛聲遠、梅花隔水亂參差

又

槩山の痛棒、蒿枝に似たり、一頓、更に思う、復た誰か有る。暮色江村、笛声遠し、梅花水を隔て、乱れて参差。

(1)『臨濟録』の「上堂」に「師乃ち云く、大衆、夫れ法の為にする者は、喪身失命を避けず。我れ二十年黄檗先師の処に在つて、三度仏法的大意を問うて、三度他の杖を賜うことを蒙むる。蒿枝の私著するが如くに相似たり。如今、更に一頓の棒を得て喫せんことを思う。誰人か我が為に行じ得ん」とある。(2)たがいに入り交じるさま。

又 栽 松

後人標榜、山門境致、來與不來、鏝頭打地、又(栽松)

後人の標榜、山門の境致。來と不來と、鏝頭地を打つ。

(1)『臨濟録』の「行録」に「師、松を栽うる次で、黄檗問う、深山裏に許多を栽えて什麼か作ん。師云く、一には山門の身に境致と作し、二には、後人の身に標榜と作さんと道いして、鏝頭を將つて地を打つこと三下す」とある。

徳山

道得道不得 棒頭乾坤黒 末後一句多 豁公焉可測

徳山

道得<sup>(1)</sup>、道不得、棒頭<sup>(2)</sup>乾坤黒し。末後<sup>(3)</sup>の一句多し、豁公、焉<sup>いず</sup>くんぞ測る可き。

(1)『五灯会元』卷七の徳山章に「衆に示して曰く、道い得るも也た三十棒、道い得ざるも也た三十棒」とある。(2)棒の先。(3)究極の最後に。『無門関』第十三則に出づ。

覬子和尚

箴籬無柄 撫覬撈蝦 神前酒盤 誰辨正邪 紙錢堆裏  
春眠足 落日江頭風捲沙

覬<sup>(1)覓す</sup>子和尚

箴籬柄無く、覬<sup>ひろ</sup>を撫い、蝦<sup>と</sup>を撈る。神前の酒盤、誰か正邪を辨ぜん。紙錢堆裏、春眠足る、落日江頭、風、沙を捲<sup>ま</sup>く。

(1)『伝灯録』卷十七の覬子章に出づ。唐末の人。洞山良价の法嗣。京兆に住するも、居所一定せず、逐日河岸に蝦覬をとって食し、夜は東山白馬廟などの紙祠の紙錢中に入って眠るので覬子和尚と言われた。終処不明。

又

神前酒臺盤 眞假無人辨 日晴風浪收 浜岸撫蝦覬

又

神前の酒臺盤<sup>(1)</sup>、眞假<sup>(2)</sup>、人の弁ずる無し。日晴れて風浪収まる、岸に沿

つて蝦覬<sup>(3)かかん</sup>を撫う。

(1)昔、宮中や貴族の家で食物を盛った大皿をのせるために使う四脚の台。(2)真実と方便。(3)えびとしじみ。

船子夾山

江天將暮 風捲絲綸 頻頻回顧 誰先翻身

船子夾山<sup>(1)</sup>

江天、將に暮れんとす、風、絲綸<sup>(2)</sup>を捲く。頻頻回顧、誰か先づ身を翻す。

(1)『五灯会元』の船子徳誠章に「師、道吾、雲巖と同道の交を為す。葉山を離れるに泊んで乃ち二同志に謂って曰く、公等、応に各々の一方に拠って葉山の宗旨を建立すべし。予、率性疎野、唯だ山水を好み、情を楽しんで自ら遣る。所能無きなり。他、後に我が所止の処を知る。若し靈利の座主に遇わば、一人を指し来れ。或は瑠球に堪えば、將に生平の所得を授け以て先師の恩に報いんとす。遂に分攜して秀州華亭に至る。一小船を泛べ、縁に随い日を度す。以て四方往来の者を接す。時の人其の高踏を知ること莫し。因つて船子和尚と号す。道吾後に京口に到り、夾山を激勉して師に参礼せしむ。師、便ち問う、大徳、甚麼れの寺にか住す。山曰く、寺は住せず。住は即ち似ず。(中略)師、又問う、垂絲千尺の意、深潭に在り鉤を離れること三寸。子、何んぞ道わす。山、口を開くを擬す。師をして一橈に水中に打落せらる。山纔かに船に上る。師、又曰く、道え道え。山、口を開くを擬す。師、又打す。山豁然として大悟す。乃ち点頭すること三下。師、江波を釣り尽して金鱗始めて遇う。山乃ち耳を掩う。師曰く、如是如是。遂に囑して曰く、汝向後、直に須らく身を藏す処没蹤跡なるべし。没蹤の処、身を藏する莫し。山乃ち行を辞し、頻々に回顧す。師遂に閤梨と喚ぶ。山乃ち首を回らす。師、橈子を豎起して曰く、汝將に謂えり、別に有りと。乃ち船を覆して水に入つて逝す。」とある。(2)天子のみことりの。(3)しばしば。しきりに。(4)ふり返つて見る。追想。回想。

又

千尺絲綸 一江煙水 鉤頭得鱗 鰾入掩耳



又

千尺の絲綸、一江の煙水、鉤頭<sup>(1)</sup>、鱗を得たり、聾人<sup>(2)</sup>、耳を掩う。

(1)かき。頭は接尾詞。(2)耳の聞えない人。

又

一橈<sup>(1)</sup>兩橈 寒涛競起 瞥爾點頭 滿身泥水

又

一橈<sup>(1)</sup>兩橈、寒涛競起<sup>(2)</sup>、瞥爾<sup>(3)</sup>として點頭<sup>(4)</sup>、滿身泥水。

(1)かい。かじ。(2)冬の波。さむざむとした波。(3)ちらりとひらめくさま。(4)首肯する。うなづく。

又

無跡<sup>(1)</sup>乎藏<sup>(2)</sup>身 不藏<sup>(3)</sup>乎無<sup>(4)</sup>跡 華亭風捲<sup>(5)</sup>綸 萬里水天碧

又

身<sup>(1)</sup>を藏<sup>(2)</sup>すに跡無く、跡無<sup>(3)</sup>きに藏れず。華亭<sup>(4)</sup>、風綸<sup>(5)</sup>を捲く、萬里の水天、碧なり。

(1)身のかくしようがない。(2)かくす所がないのでかくせない。(3)江蘇省・松江府、船子徳誠と夾山善会の師資の機縁が契つた地。

又

没蹤跡處 有人尋討 離鉤三寸 子何不道 點頭掩耳  
渾輪吞棗 頻頻回顧 珠傾栲栳 江天雨晴 月色愈好

又

没蹤跡の処、人有つて尋討<sup>(2)</sup>す。鉤を離れて三寸、子、何んぞ道わざる。頭を點じて耳を掩う、渾輪<sup>(3)</sup>に棗を吞む。頻頻<sup>(4)</sup>回顧し、珠、栲栳<sup>(5)</sup>を傾く。江天雨晴れて、月色愈々好し。

(1)あとかたもない。(2)たずねまぐる。(3)万物がまだ分離しないさま。はつきりしないさま。(4)なつめ。(5)しばしば。しきりに。(6)やなぎの枝を折り曲げて編んだ容器。『会元』の仏鑑章に「師、円悟と同じく語話する次で、東寺、仰山に鎮海の明珠を問う因縁を挙す(中略)師、悟に謂つて曰く、東寺、祇だ一顆の珠を索む、仰山當下に一栲栳を傾出す。悟深く之を肯う」とある。

俱胝和尚

豎指<sup>(1)</sup>斷指 不見其指 童子回頭 還我一指

俱胝和尚

指を豎て、指を斷つ。其の指を見ず。童子、頭を回らす。我に一指を還せ。

(1)『伝灯録』十一、天龍和尚の法嗣、婺州金華の俱胝和尚章に、「凡そ参学の僧有りて到れば、師、唯だ一指を挙するのみ。別に提唱すること無し。一童子有り。外に於て人に和尚何んの法要を説くと語り曰われて、童子、指頭を豎起す。歸つて師に挙似す。師、乃を似て其の指頭を斷んず。童子叫喚して走り出す。師、召すこと一声。童子、首を回らす。師却つて指頭を豎起す。童子、豁然として領解す。師、將に順世せんとす。衆に謂つて曰く、吾、天龍一指頭の禪を得。一生用い尽さず。言い訖つて示滅す」とある。

又

放去一指 收來一指 俱胝承當處 莽鹵 一指一指

又

放去一指、収来一指。俱抵承当の処、莽鹵。一指一指。

(1) 放は放行。自由に任すこと。収は収束、把住の意。「去、来」は動作の反復を示す。放行したり、把住したりすること。(2) 会得・領得すること。(3) であらめにやる。がさつに行う。

定上座橋上逢三座主

禪河窮底 傍僧連忙 忝忝 流水潺潺

(1) 定上座、橋上で三座主に逢う。

禪河、底を窮め、傍僧、連忙す。去れ去れ、流茫茫。

(1) 『碧巖録』三十二則の評唱に「又た鎮州に在りて齋より回る。橋上に到りて歌う。三人の座主に逢う。一人問う。如何なるかはれ禪河深き処、須らく底を窮むべしと。定擒住して橋下に抛向せんと擬す。時に二座主、連忙して救つて云く、休みね、休みね。是れ伊、上座に触忤す。且く望むらくは慈悲せよ。定云く、是れ二座主にあらずんば、他の窮めて底に到り去るに従せん」とある。(2) 一般には尼連禪河を言う。ここでは単に河のこと。(3) あわてること。(4) さかんさま。

端師子

天資慈祥 戒檢不違 師子奮迅 香象失威

(1) 端師子

天資慈祥、戒檢違せず。師子奮迅、香象威を失す。

(1) 『羅湖野録』の淨端の章に「齊岳禪師、杭の龍華に住す。道價、東吳に照映す。端住きて参礼す。機縁相契い覚えず奮迅し、翻身して發貌の状を作す。岳因つて之く可し。是れ自り、叢林雅に号して端師子と為す。端天資慈祥、戒檢違せず。飢えを恤え、寒を問う。

諸已に切なるが如し」とある。(2) 天のさすけた性質。うまれつき。(3) いくくしむ心(4) 戒律のきまり。(5) 師家の悪辣な手段に屈することなく師に参すること。(6) 『證道歌』に「香象奔波に威を失す」とある。象はどんな深い河も足をしっかりとつけてわたるが、その象がすさまじい波にほんろうされて見えている様。

政黄牛

橋上山萬層 橋下水千里 一時復一時 黃犢不來此

(1) 政黄牛

橋上、山万層、橋下、水千里。一時復た一時、黃犢、此に來らず。

(1) 餘杭惟正のこと。字は煥然。钱塘の地方官である侍郎の蔣堂と交友したが、訪問の時は、黄色の子牛に跨がり、水瓶を角にかけて出かけた故事による。(2) 『会元』の惟正章の山中の偈に「橋上、山万層、橋下、水千里、唯だ白鷺鷥有り、我れ常に此に來たりて見る」とある。(3) 黄色い子牛。

又

思惟國士筵 有口不談禪 一頭黃犢 東牽西牽

又

思惟す、國士の筵、口有りて禪を談ぜず。一頭の黃犢、東に牽き、西に牽く。

(1) 『会天』卷十の惟正章に「葉内翰清臣、金陵に牧す。師を迎えて道を語る。一日、葉曰く、明日、府に燕飲有り。師固より律を奉る。能く我が為に少しく留ること一日、清話を款(しる)さんやいなや。師、一偈を留めて返る。曰く、昨日、曾つて今日を將つて期す。門を出でて杖に倚る。又思惟す、僧と為る、祇だ合に巖谷に居すべし。國士筵中、甚だ宜しからず」とある。思いはかる。(2) 座席。(3) 『会元』の惟正章に「有る人が問うて曰く、師、禪師の名を以て乃ち禪を談ぜざるは何ぞ。吾れ懶、寧る曲折を飯らんや。但だ日夜万象を煩う。為めに敷演するのみ」とある。

又

國士筵中 不得<sup>1</sup>復宜 黃犢由來無鼻索 六橋煙雨艸離離

又

國士筵中、便宜<sup>1</sup>を得ず。黃犢由來、鼻索無し、六橋<sup>2</sup>の煙雨、艸離離<sup>3</sup>。

(1) たまたま都合なこと。うまい利益をうること。(2) 西湖にあたる六つの橋。(3) ならば連なるさま

又

動以對靜未始有極 無靜無動 當門荆棘 欲到上流 飲我牛 誰家帆影懸秋色

又

動は以て靜に對す、未だ始めより極に有らず。靜無く動無し。當門の荆棘。上流に到つて、我が牛に飲せんと欲す、誰が家の帆影ぞ、秋色に懸く。

(1) 『會元』の惟正章に「孟夏八日、衆に語つて曰く、夫れ動は以て靜に對す。未だ始めより極に有らず。吾が一動年を歷ること六十有四、今靜にせん。然も動靜本と何んぞ有らんや。是に於て泊然として逝す」とある。(2) いばら。障害になるもの。

又

遍界木盆大 眉稜漢月涼 夜深人不レ見 一椀橘皮湯

又

遍界<sup>1</sup>の木盆大に、眉稜の漢月涼し。夜深めて人見ず、一椀の橘皮湯<sup>3</sup>。

(1) 法界のあまねくいたる所。(2) 『會元』の惟正章に「夏秋好んで月を翫ぶ。膝を大盆の中に盤じ池上に浮べ、自ら其の盆を旋して吟笑して且に達す、率いて以て常と為す」とある。(3) 同前に「九峰の韶禪師、嘗つて院に客す。一夕に臥せんとす。師、之を邀(むか)えて曰く、月色此の如し、勞生擾攘、之に對す者、能く幾人ぞ。峯唯々するのみ。久しくして童子を呼んで熱灸せしむ。峯方に饑えて藥石を作ると意う。頃乃(あ)つて橘皮湯一盃。峯匿笑して曰く、無乃ち太清か。」とある。

虛堂 天澤棹長老請

虛空作布袴 針眼裏藏身 天澤無涓滴 日多織已眞

虛堂(天澤棹長老の請)

虛空を布袴と作し、針眼裏に身を藏す。天澤に涓滴無く、日多、織已に眞。

(1) 虛堂智愚(一一八五、一二六九)松源派。『増統伝燈録』等に伝あり。(2) 『虛堂録』に「師、室中に垂語して曰く、己に眼未だ明ならざる底、甚に困つてか虚空を將つて布袴と作して著く。地に画して窄と為す。甚に困つてか、者箇を透す。海に入り沙を弄す底、甚に困つてか針鋒頭上に向つて足を翹(あ)げる。」とある。(3) 『虛堂録』の「行状」に「小庵を望雲亭の東に創して、扁して天沢と曰う。就いて塔を築き歸藏の地と為す」とある。(4) 水のしたたり。小さなものたえ。(5) 『虛堂録』の中に南浦(大応国師)を送る偈に「門庭を敲磕して細に揣摩す、路頭尽く処、再び經過す、明えに説与す、虚堂叟、東海の児孫、日に転た多からん」とある。(6) 前兆、予言。

明慧上人

苧磨風煙 舍那妙體 書信纒通 海潮大啓

明慧上人

苧磨<sup>2</sup>の風煙、舍那<sup>3</sup>の妙體、書信纒かに通ずれば、海潮大いに啓く。

(1)『本朝高僧伝』に「釈高弁は明慧と号す。云々」とある。又「後鳥羽上皇、勅して梅尾山を賜い、永く華嚴興隆の地と爲す。高山寺と号す」とある。(2)『明慧別伝』に「上人書を旧樓の紀州菟磨島に寄せて曰く、島の自体を思えば、是れ欲界撃の法、顯形二色の種類、眼根の所取、眼識の所縁、八事俱生の体なり。色性即ち。智なれば、悟らざる所無し。智性即ち理なれば、遍せざる所無し。理は即ち真加、真加は即ち法身、無差別の理。理は即ち衆生界、更に差異無し。然るに非常と雖ども衆生の恩を隔つべからず。何んぞ況んや国土身は即ち如来十身の隨一なり。盧舍那妙体の外の物に非ず。大相円融無碍の法門を談ずれば、島の自体則ち国土身なり。」とある。(3)毘盧舍那の略。

佛光國師

法門無學 無明佛光 汝如會取 敢過扶桑

佛光國師

法門は無學、無明は佛光、汝、如し會取せば、敢えて扶桑に過らんや

(1)『延宝伝燈録』に出づ。径山の無準師範の法嗣。鎌倉建長寺に住し、後に円覚寺が建てられ開山となる。佛光円満常照國師という。(2)事理を了解すること。(3)日本のこと。

圓應禪師

作甚空海 滅卻佛燈 永源鬻佛 地裂天崩

円應禪師

甚んの空海とか作さん、却つて佛燈を滅す。永源の鬻佛、地裂け天崩る。

(1)『延宝伝燈録』に出づ。永源寺開山寂室元光のこと。(2)『寂室録』の行状に「小師の、道證は、始め金剛乗教に入る。厥の祖、弘法大師の肉身、尚お存すと聞き、高野山に行き、毫び瞻礼せんことを祈る。弘法、夢を感じて曰く、江州は寂室禪師と称するは即ち是れなり。云々」とある。(3)寂室は、佛燈國師の法を嗣ぐ。(4)いずみみがわき出るさま。(5)『山庵雜録』の雪巖欽禪師の語に「破蒲團上に地裂け天崩る」の語がある。

大應國師

古帆掛未掛 靠倒老虛堂 大唐國裏明明說 東海兒孫不證羊

大應國師

古帆掛未掛、靠倒す老虛堂。大唐國裏、明明に説く、東海の兒孫、羊を證せず。

(1)『延宝伝燈録』に出づ。南浦紹明のこと。法を虚堂智愚に嗣ぐ。(2)『延宝伝燈録』の伝の中に「堂便ち問う、古帆未だ掛けざる時如何ん。師曰く、燕螟眼裏の五須彌。堂曰く、掛けて後如何ん。師曰く、黄河北に向つて流る」とある。(3)『愚庵録』の中に「建長の明南浦四会録に題す」の偈に「靠倒す虚堂の老古錐」の語がある。(4)『論語』の中に「其の父、羊を攘(ぬす)んで子、之を證す」とある。

又

古帆未掛 乘流向東 紹若明白 兒孫失宗

又

古帆未掛、流れに乗じて東に向う。紹、若し明白ならば、兒孫、宗を失せん。

(1)『虚堂録』に「日本の紹明侍者請うて曰く、紹既に明白、語は宗を失せず、手頭簸弄す、金圈の栗蓬、大唐國裏、人の会する無し、又却つて海れに乗じて海東を過ぐ」とある。

大燈國師

踏翻雲關。奪卻龍寶。虚空咬牙 出艸入艸 不向針頭 削鐵不敢問著 烏頭養雀兒 底請和尚道

大灯国師<sup>(1)</sup>

雲関を踏翻し、龍宝<sup>(3)</sup>を奪却す。虚空、牙を咬み、出艸入艸、針頭<sup>(4)</sup>に向つて鉄を削らざることとは、敢えて問著せず。烏頭、雀兒を養う底、請う、和尚道え。

(1)『延宝伝灯録』に出づ。宗峯妙超のこと。法を大応国師に嗣ぐ。大徳寺開山。(2)『碧巖録』第八則、「雲門関字」の公案。大応国師より雲門関字の公案を与えられ大悟する。投機の偈に「一回雲関を透過し了つて、南北東西、活路通ず。夕処朝遊賓主を没す、脚頭脚底清風起す。」とある。(3)大徳寺の山号。(4)『大燈録』の「開爐上堂」の語に「大徳門下、終に針頭に向つて鉄を削らざれば、何んや」とある。又、「臘八上堂」に「大徳は未だ嘗つて烏頭、雀兒を養うことを解せずんばあらず」とある。

又

龍寶不珍 大徳無隣 第五橋畔 風夕霜晨

又

龍宝、珍ならず、大徳、隣無し。<sup>(1)</sup>第五橋畔、風夕霜晨。<sup>(2)</sup>

(1)『論語』に「子曰く、徳は孤ならず、必ず隣有り」とある。(2)大灯国師の五条の橋の下での聖胎長養の故事。『狂雲集』の「大灯国師の行状に題す」の頌に「風飡水宿 人の記無し。第五橋辺二十年」とある。

關山国師

雨灑風吹 老屋難支 活計有幾 箍桶箴籬

関山国師<sup>(1)</sup>

雨灑<sup>そそ</sup>ぎ、風吹く、老屋支え難し。活計<sup>いひ</sup>幾くか有る、箍桶<sup>こつ</sup>箴籬<sup>そうり</sup>。

(1)『延宝伝灯録』に出づ。法を大灯国師に嗣ぐ。妙心寺開山、関山慧玄のこと。雲門関字によつて大悟す。本有円成佛心覚性国師と敕諡される。(2)『延宝伝灯録』の中に「一時屋漏す。師、急に召して曰く、器物を持ち来れ。一童、亟(すみや)かに箴籬を持ち来たる。師、大いに之を賞む。或は箍桶を索し来たる」とある。

又

庭前柏樹賊何在 漏處箴籬兒走過 春滿長安十萬戶 城隈古寺暮雲多

又

庭前の柏樹、賊何れにか在る。漏處の箴籬兒、走過す。<sup>(1)</sup>春滿つ、長安の十萬戶、城隈<sup>じまがき</sup>の古寺、暮雲<sup>(3)</sup>多し。

(1)『延宝伝灯録』の中、関山慧玄章に「師、室中、常に趙州柏樹子の話を拈じ、学人に示して曰く、柏樹子の話に賊の機有り、汝等、作麼生か会す」とある。(2)城のすみ。城のかたすみ。(3)夕ぐれの雲。

又

法不正兮心不妙 庭前柏樹賊相看 翻身風水泉頭去 無那長安雪後寒

又

法は正ならず、心は妙ならず。庭前の柏樹、賊、相看る。<sup>(1)</sup>風水泉頭に翻身し去つて、長安雪後の寒きを那んともすること無し。

(1)『延宝伝灯録』の関山章に「師、束装頂笠して曰く、我れ行脚し去らん。授翁の粥を相携えて風水泉の樹下に到り、立ちながら出世の顛末を談じて屹然として化を示す」とある。

又

滿床風雨不知貧 籬桶笊籬惱殺人 家醜竟難遮掩處  
又聞徽號下天宸

又

滿床<sup>(1)</sup>の風雨、貧を知らず、籬桶笊籬、人を惱殺す。<sup>(2)</sup>  
家醜、竟に遮掩し難き處、又聞く、徽号<sup>(4)</sup>の天宸<sup>(5)</sup>より下ることを。

(1)ゆかいっぱい。(2)非常になやまずこと。(3)おおいかくすこと。(4)はたじるし。ほめたたえる称号。(5)天帝のすまい。

又

者裏有甚麼玄 無端得白頭粥 摘茶體用不分 活計  
和根打失

又

者裏、甚麼の玄か有る、端無く、白頭<sup>(1)</sup>の粥を得。  
摘茶<sup>(2)</sup>、体用<sup>(3)</sup>分たず、活計、根に和して打失す。

(1)授翁宗粥のこと。関山に嗣法す。『延宝伝灯録』に出づ。(2)『延宝伝灯録』の関山章に「普請して茶を摘む次で、細雨下に濺ぐ。師、知事に謂つて曰く、奈何ぞ清衆を濡湿す。当に茶樹を伐り来つて庫下に就いて之を摘すべし」とある。(3)『伝灯録』の鴻山靈祐章に「普請して茶を摘む。師、仰山に謂つて曰く、終日茶を摘む。只だ子が声を聞き、子が形を見ず。請う、本形相を現せよ看ん。仰山、茶樹を撼かす。師曰く、子、只だ其の用を得て其の体を得ず。仰山曰く、和尚只だ其の体を得て其の用を得ず。師曰く、子に三十棒を放す」とある。

又

滅卻正法 死我盡妙心 花園雨過 隔葉靈禽

又

正法を滅却し、妙心を死尽す。  
花園雨過ぐ、葉を隔る<sup>(2)</sup>靈禽<sup>(1)</sup>。

(1)妙心寺のこと。(2)不思議な鳥獸。